薬種商
大きな看板
金粒丸

江戸時代、参宮の旅人で賑わう伊勢本街道沿いにあった西池上太好庵の金粒丸は参宮土産として人気があった。今も当時の看板が残り、町文化財に指定されている。

江戸時代、伊勢本街道沿いの西池上には「金粒丸」という薬を製造販売する太好庵がありました。

当時の携帯できる小さな旅行案内書『道中案内』の西池上のページには太好庵の店の絵が描かれています。

ある本には伊勢朝熊の「萬金丹」と同じように胃腸や腹痛、万病に効くと書かれています。どちらも小さな丸薬ですから軽量でかさばらず伊勢参宮の土産として全国に広まりました。

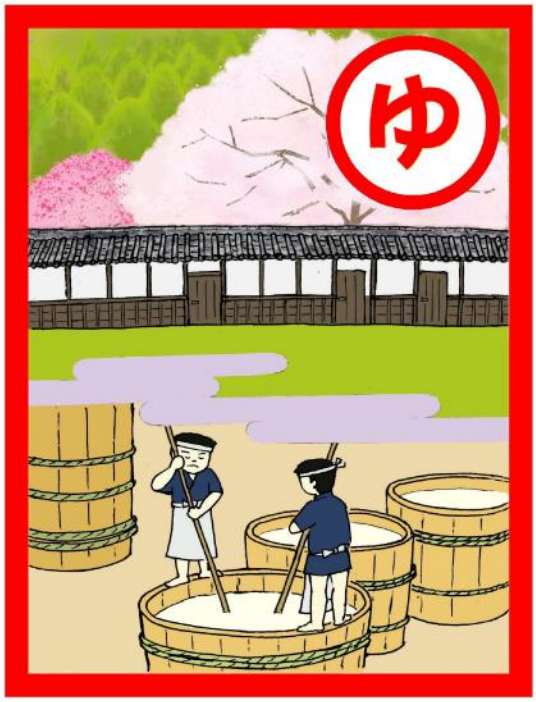
こうした薬は自分の力、自分の足に頼るしかない昔の旅の心強いお守りでもあったことでしょう。

伊勢国司北畠氏の家臣だった太好庵村林家の先祖が北畠材親の代に戦で手柄をあげました。褒美に漢方薬の製法の書付を貰い、御薬種奉行をつとめ西池上の地で代々秘法を伝えました。

寛永年間（一六二四～四四）に江戸芝神明町に薬店太好庵を出し明治時代の末まで繁昌しました。

今も伊勢本街道に面した白壁の太好庵の建物や同家が建立した私仏堂の隋泉寺が残されています。

後、村林家から譲り受け金粒丸を販売した西村家には今も当時の立派な看板が残り、町文化財に指定されています。



油田公園
昔は酒蔵並んでた

醸造業が盛んだった車川で酒造業を営んでいた油田家。戦後、当主油田篤太郎は県教育委員長に就任するなど教育文化に貢献した。現在寄贈された跡地は油田公園となっている。

醸造業が盛んだった車川では享保2年に北村醤油醸造場と油田酒醸造場が、安政五年に北村酒醸造場が創業しています。村を流れる濁川の名は酒米や麦を大量に洗い水が濁るためついたと言われています。

三工場の明治44年の生産額は合わせて十万五千円余。当時、五ケ谷村と丹生村あわせた歳出が一万四千円余ですから、その繁栄ぶりがわかります。大戦前には北村醤油醸造場がサンフランシスコの万国博覧会に出品し表彰されたこともありました。

町に寄贈され、跡地が油田公園となっている油田酒醸造は太平洋戦争末期に廃業し、今は明治頃建てられた母屋と物置の長屋が残るだけ。他の2軒も以前に廃業しています。

タイル貼りのおくどさんや流し台のある母屋の台所までは玄関から土間のまま続きます。日本酒の銘柄「剛気」の看板や、「民謡 油田酒造店」とある暖簾も保存されています。

蔵跡に広がる芝生に春は桜、秋は銀杏、メタセコイアなどの黄葉が映え見事です。

敷地内の一メートルほどの段差の石垣に原料米を搗いた水車の石臼と同店の歴史を語る碑文が刻まれたブロンズ製の銅板が埋め込れています。

戦後、当主油田篤太郎は三重県教育委員長に選ばれるなど地域の教育文化に貢献しました。

用水路　水有り難き
秋実る　今も見つめる　彦左衛門さん

江戸時代末の丹生の人西村彦左衛門は櫛田川に堰を造り、水路を丹生まで引く計画を立て実現させた。この立梅用水は今も農業や人々の生活を潤している。生家横の小公園には銅像が立つ。平成26年用水路としては初めての国の登録記念物になった。

当町勢和地区を流れる立梅用水は全長28kmの灌漑用水です。立梅（現松阪市）で櫛田川に堰を造り、川水を取り入れて波多瀬・片野・朝柄・古江・丹生まで続く用水を掘り自然の高低差で水を送っています。

元禄時代（一六八八～一七〇四）、紀州藩の役人の大畑才蔵が櫛田川上流を調査し水路の絵図を作っています。

百年ほど後、丹生の地士西村彦左衛門はこの絵図とほぼ同じルートで用水の建設を計画。水路が通る五ヶ村連名で紀州藩に井堰建設の嘆願をしました。何度もお願いを続け、文政3年（一八二〇）、紀州藩が立梅での井堰工事に着手。村人たちも力を合わせて三年後に完成しました。

立梅用水は今も地域の農業を支え、生活用水や防火用水、そして発電に使われています。

明治になり紀州藩からの援助がなくなると用水は荒れはてました。そこへ電気の時代がやってきます。農業に水が必要ない季節だけ発電に使うため電気会社が立梅井堰などの修理をしてくれたのです。

生家横には小公園ができ彦左衛門の銅像が立っています。用水を管理運営する立梅用水土地改良区は子供たちへの環境教育など用水の活用に努め、春の祭典では彦左衛門への感謝をこめ慰霊を行っています。

立梅用水は平成26年（二〇一四）、用水路としては初めて国の登録記念物になりました。

蘭学の基礎を築いた野呂元丈

江戸時代中期、医学、本草学を学んでいた波多瀬の野呂元丈は幕府の薬草御用に始まり、御目見医師、寄合医師となった。将軍の命でオランダ語を学び、蘭学の祖と言われる。

蘭学の先駆者と言われる野呂元丈は江戸時代の中ごろ元禄六年に波多瀬に生まれました。二一歳の時、親戚の医師野呂家の養子になり、京都で医学・儒学・本草学を松坂の人丹羽正伯らと共に学びました。

江戸時代の南勢地域のほとんどは紀州藩の領地でしたが、享保元年、その紀州藩主徳川吉宗が八代将軍となりました。

吉宗は財政の再建に新田開発を進めたり、生活に役立つ学問、実学を奨励するなど様々な改革（享保の改革）を行いました。それにあたり和歌山や伊勢の多くの人材が幕府に登用されました。

質素倹約を第一とし、武芸と実学を奨励します。庶民生活にも目を向けて養生所の設立や町火消をつくるなどしました。

幕府の採薬師として召し抱えられた丹羽正伯は京都でともに学んだ元丈を薬草御用という仕事に推薦しました。彼らは箱根山をはじめとして、全国各地へ薬となる有用な植物を探す薬草採集の旅を行います。

元丈はその間も医師としての勉学を続け、将軍に謁見できる御目見医師に任用され、後、寄合医師にまで昇進しました。

将軍吉宗は実学をオランダの本から学ぶ必要を感じ、洋書の禁をゆるめ、元丈にオランダ語を学ぶよう命じます。元丈は江戸へ一年に一度出府するオランダ商館長の宿に出向き聞き取りをして学びました。

西洋本草書を日本文で説明する初めての書物は元丈の『和蘭陀本草和解』でした。

両郡橋（りょうぐんばし）
松阪・多気を つなぐ橋

明治21年射和と相可の間に初めて木造の橋が架かった。多気郡と飯野郡を結ぶため両郡橋と名付けられた。現在の橋は3代目になる。

江戸時代の相可は、奈良と伊勢を結ぶ伊勢本街道の宿場としてにぎわいました。松坂から熊野街道に抜ける熊野道も通っていました。

明治になると松阪の経済的な重要性が増し、熊野街道は松阪を起点とした新熊野街道となりました。

江戸中期には今の湊屋の前から相可と射和を結ぶ渡船がありました。この渡し場の跡を利用して明治21（一八八八）年1月、本格的な橋が架けられ、伊勢から南紀への流通の強化に大きく貢献することとなりました。

「両郡橋」の名は多気郡の相可と飯野郡の射和村（現松阪市射和町）を結ぶことから名づけられました。

しかし一代目は木造の単純な構造で水が増えるとすぐ流されたため、明治41（一九〇八）年に架け替えられました。

三角形を基本の形とするトラス橋ですが、ほとんどが木製で歩く度に床面がガタガタ音がしたそうです。今も煉瓦積みの橋台がJA相可支店の裏に残っており、当時専門用語のピアーと呼ばれていた橋脚は長い間、川の中に残されていました。

昭和32年には国道42号の開通に伴い、少し下流に三代目が架けられました。これが今の両郡橋です。